

東京大学 先端科学技術研究センター 二十年史

ある一部局の自省録



写真で見る先端研の20年



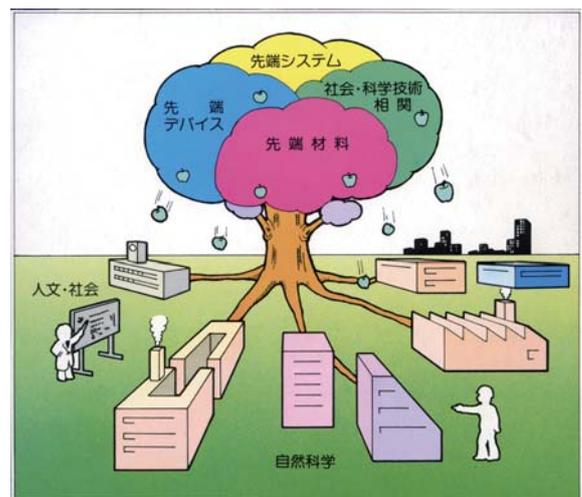
航空研究所全景。(撮影年不詳、1959～61年ごろと思われる)

かつて駒場Ⅱキャンパスでは人工衛星の開発も行われていて、皇太子明仁殿下（今上天皇）も視察に訪れた。



先 端研の所在する駒場Ⅱキャンパスは、かつては東京帝国大学航空研究所が所在し、航研機などに代表される世界最先端の技術開発力を誇っていた。戦後は東京大学宇宙航空研究所が立地し、現在の日本の宇宙開発の礎となった。この地に先端研が設立されたのは1987年5月21日である。(序章、第5章参照)

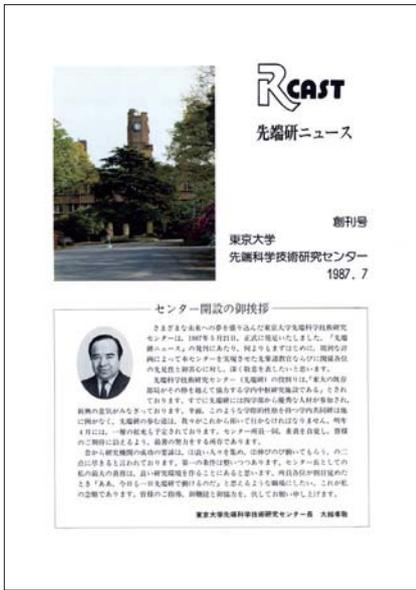
先端研は、「学際性」、「流動性」、「国際性」、「公開性」という4つのモットーの下、設立当初から、10年任期制、寄付研究部門など、ユニークで実験的な組織体制、人事制度を採用し、既存の硬直した大学システムの改革を目指した。(第1章、第2章等参照)



先端研設立前の1986年に作成されたパンフレットの表紙に描かれた、先端研のイメージ図。先端研の4部門から生まれた果実を、社会に還元し、社会からのフィードバックを研究に活かすという、先端研の理念が象徴されている。



先端研開所式（1987年）



先端研ニュース創刊号
 先端研を作り上げた猪瀬博元工学部長の挨拶などが掲載されている。

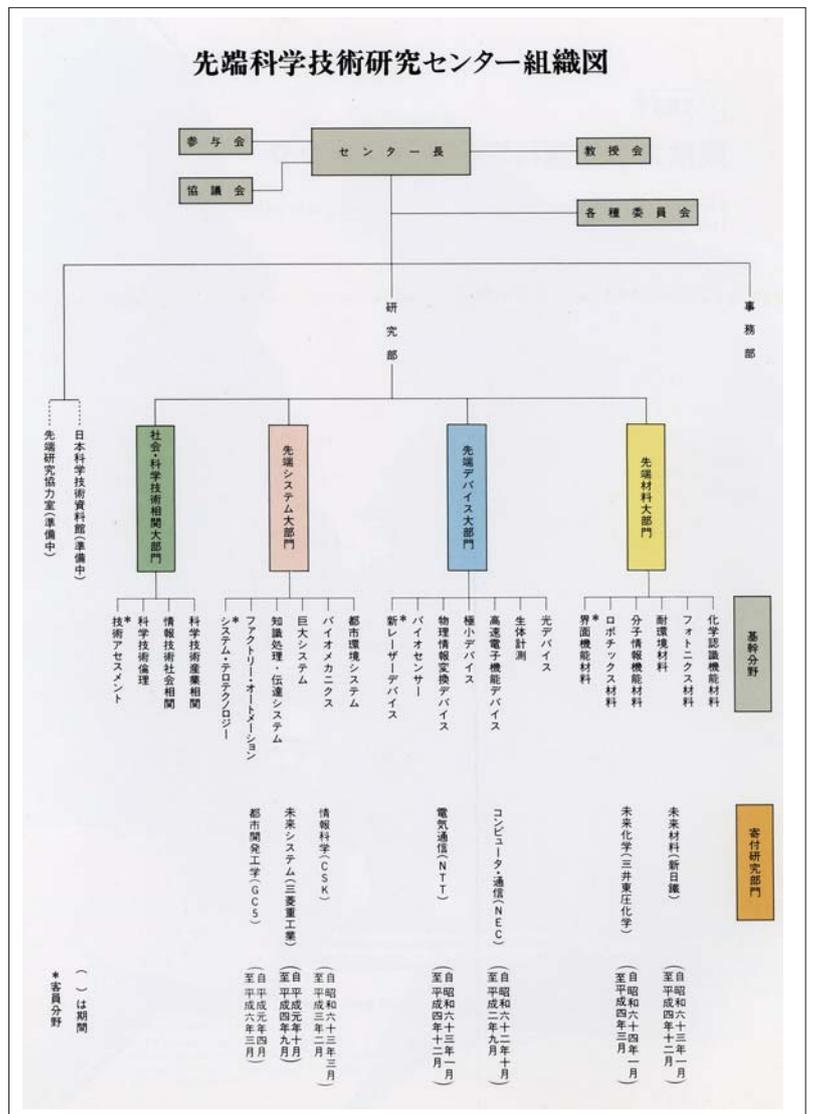


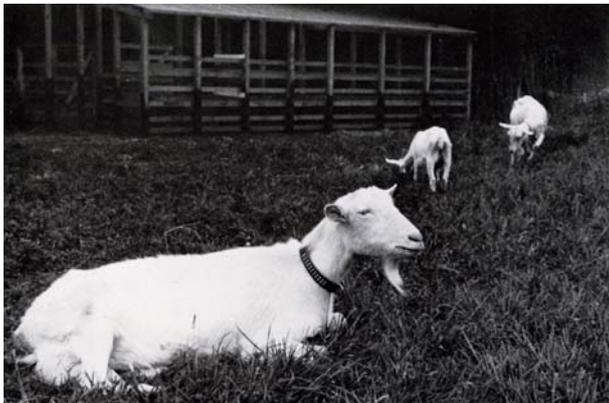
センター教職員の集合写真（1989年1月）
 いわゆる7人の侍と呼ばれた教授陣をはじめ、黎明期を支えたスタッフ。

4 大部門7基幹分野からスタートした先端研は、88年に工学部附属境界領域研究施設の定員を引き継ぎ、本格的な研究組織となる。その後、大学院先端学際工学専攻（92年）、国際・産学共同研究センター（96年）、知的財産権大部門（97年）、先端経済工学研究センター（99年）など、関連する組織を増やし、陣容を大きくしている。（第1章参照）

一方、流動性の原則により、所属教員の入替わりは速く、20年間先端研に所属した教員は1人もいない。

1990年の先端研概要に掲載された組織図
 97年まで4大部門の構成は大きく変わらなかったが、担当の教員は毎年のように入れ替わった。





かつてのキャンパスでは、人工心臓の研究のため、ヤギが放牧されていた。



かつてクリーンルームが置かれた22号館。

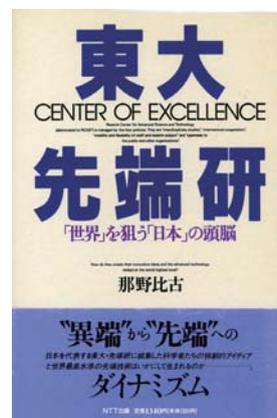
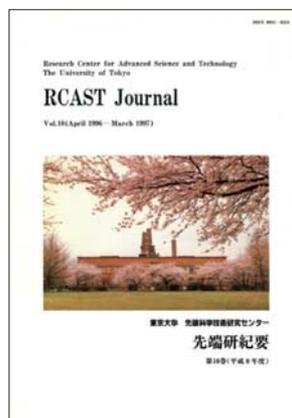


89年に大阪で行われたシンポジウムで講演する柳田博明センター長。



在原木製作所による寄附研究部門「環境バイオテクノロジー」の看板を掛ける二木鋭雄センター長。

『先端研紀要』かつて発行されていた、先端研と所属研究者の活動をまとめた年報。



1991年に出版された『東大 先端研—「世界」を狙う「日本」の頭脳』

先端研は、特徴的な組織、制度だけでなく、ユニークで卓越した研究によっても注目を浴びていた。先端研では、これに甘んじず、積極的な広報・交流活動を展開することで、東大や社会の中で自らの存在感を高めていった。(第4章参照)



『先端研探検団第一回報告』この活動が話題となり、NHK衛星放送の番組にもなった。



1号館風洞を視察する立花隆客員教授率いる先端研探検団。



2004年刊行『挑戦続く東大先端研—経営戦略で先頭ひた走る』



「科学技術産業創生と大学改革シンポジウム」(2002年) スーパーCOEの陣頭指揮を執った南谷崇センター長が改革の方向性を示す。

90年代半ばごろから、先端研の組織、キャンパスはめまぐるしい変動を見せる。各種関連組織の設立、大部門改組、そして知財関連の会社組織の設立が続く。2001年から始まったスーパーCOEでは特任教員制度が導入され、2004年の国立大学法人化に際し正式に附置研究所となり、大部門制が廃止される。



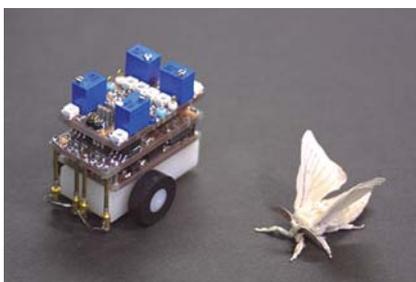
「時間のつる草」ウェアラブルコンピュータなどを使い、人の日常の活動をデジタル化し、アーカイブするという文理融合のプロジェクト。2006年の先端研フォーラムで公開された。



電気人口喉頭



東京大学2007年度入学式で祝辞を贈る福島智准教授。バリアフリーは20年目を迎えた先端研の中核の研究テーマである。



フェロモン源探索ロボット
生物学、工学、情報学を架橋する、「学際性」の先端研らしい研究のひとつ。

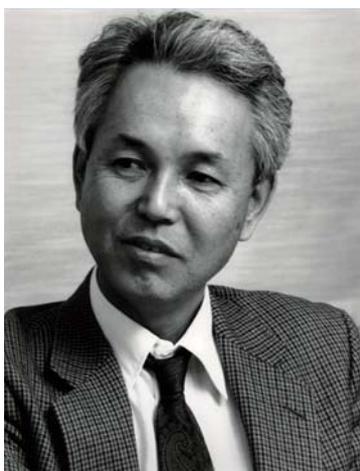
先端研ウェブサイト「研究内容」
先端研ではウェブを通じて研究成果を積極的に公開している。写真は光触媒による環境浄化への取り組みについての解説。



歴代センター長・所長 (第9代から)



第1代 大越孝敬
1987年5月21日～89年3月31日



第2代 柳田博明
1989年4月1日～91年3月31日



第3代 大須賀節雄
1991年4月1日～93年3月31日



第4代 村上陽一郎
1993年4月1日～95年3月31日



第5代 岸輝雄
1995年4月1日～97年3月31日



第6代 二木鋭雄
1997年4月1日～99年3月31日



第7代 岡部洋一
1999年4月1日～2001年3月31日



第8代 南谷 崇
2001年4月1日～04年3月31日



第9代 橋本和仁
2004年4月1日～07年3月31日



発刊の辞

東京大学先端科学技術研究センター所長

宮野健次郎

東京大学先端科学技術研究センター（先端研）が設立20周年を迎えるに当たり「二十年史」を編集し、ここに刊行する。

学問の継続性をその重要な任務の一つとする大学にあって、一部局の20年間に取り立てて変動を期待すべくもないと思われる向きもあろう。しかしこの「二十年史」を一読すれば明らかなように、先端研において変化のなかった年はない。それはときに堂々巡りであったり、行き過ぎの反動であったりしたこともあろうが、結果的には常に世の変化に先駆けるという形で、先端研が先端であり続ける原動力であったと言ってよい。

生物が進化するためにはある頻度で変異を繰り返す必要があるように、組織が進化するために必要な変化の速度というものがある。先端研が速度をもって変化し続けることが出来た背景を、内部から観察すると、停滞への強い危機意識が常に共有されているという特殊な要因があるように見える。これは、継続性というものを殆ど見出すことができない先端研の歴史の中で、連続と続いている唯一の精神風土であると言っても過言ではないだろう。

このような変化が一つの頂点を迎えたのが、2001年に始まったスーパー COEであった。教職員が1年を経ずして文字通り倍増するという事態は、個人はおろか全体の統計的な把握さえ困難な状況を生み出した。紀要や業績一覧といった、研究組織であれば恒常的に維持されるべきものが断絶してしまったことにも、その衝撃の大きさが現れている。このたび、20周年を迎えることを奇貨として、現時点で収集できる限りの事実を記録に留めることを目的に「二十年史」の編纂を企図した。このまま放置すれば散逸・消失してしまう恐れのある資料を収集・整理し、また先端研設立に深くかかわった方々から直接聞き書きをするという機会は、この機を逸すれば二度と巡って来なかったであろう。先端研がさらに幸運であったのは、聞き書きをし、また分類もされずに倉庫に放置されてあった書類を丹念に解読するという作業をプロとして担って戴いた御厨教授、菅原特任准教授を丁度この時期先端研に得たということであった。

「二十年史」は試みの記録である。もって範とすべきか、他山の石とすべきか、どちらに使うにせよ、役に立つことを切望する。先端研の存在意義は、ほぼこの一点だけにあるのだから。

2007年10月



編集委員会を代表して

東京大学先端科学技術研究センター
広報委員長兼二十年史編集委員長

御厨 貴

『たかが20年、されど20年－先端研の「先端」とは何か』と題して、今年6月、駒場のキャンパス公開に際して、先端研創立20年記念講演と銘打ち、話をしました。話の中心は、副題の「先端」という言葉の意味の解明にありました。編集委員会の実務を一手に引き受けてくれた、特任准教授の菅原琢さんを責任者とするスタッフが集めまとめてくれた様々な資料（『自省録』の未定稿を含む）を基礎にしています。熱心な聴衆を前に話をしている分かってきたのは、「先端」という2文字の持つ複雑性でした。確かに「先端」という言葉に、20世紀末から21世紀初にかけての20年間にわたる東京大学先端科学技術研究センターの存在理由は、表象されているのです。

「先端」はそれこそたかが20年の間に様々な彩りを添えながら意味内容を変えていき、されど20年の実感を伴うものになります。「先端」へのこだわりは、続いて「科学技術」とは何かという問題に連鎖していきます。今を去ること40年前、1970年前後の高度成長真只中のこの国では、「科学技術」の発展は人類の進歩と共に永遠に続くと思われていました。その「科学技術」信仰が揺らぎ始めたのが1980年代であり、そこから先端研は出発しているのです。

「先端」の意味の複雑性と「科学技術」の信仰の揺らぎを、先端研はどのように受け止め、いかにメッセージを発信してきたか、そのことを検証しようと試みたのが、ローマ帝国の皇帝マルクス・アウレリウスのひそみに倣った、この『自省録』に他なりません。文字通り散乱し、あちこちにあった資料群を探し出し、歴代センター長や故事来歴を知っている先輩たちに、オーラル・ヒストリーの手法を用いて証言を引き出すといった、精査と荒技を組み合わせた編集活動は、昨年10月に始まり、ちょうど1年が経ちました。

無から有を生む作業を只管続けてくれたスタッフにまずは感謝をせねばなりません。東大法学部の蒲島郁夫研究室仕込みの英才振りを、編集の妙技に見事に発揮してくれた菅原琢特任准教授、彼の指揮の下一条乱れぬ働き振りをみせた、わが御厨ゼミのOB学生、鈴木健太郎（現・防衛省）、通傳友浩（現・日本銀行）、今は学部3年生となった川口航史・広瀬一朗・谷森太輔、菅原ゼミの2年生古橋直樹の諸君です。先端研を「駒場の辺境」と呼び習わし、わがゼミを通じて先端研を第二の故郷にしてしまった文系学生のガンバリには脱帽です。

ただし、『自省録』は一見ハードデータの連続のように見えます。もっともハードデータの集積も、コンピューター処理を含めて気の遠くなるような作業ではありました。そのハードデータに添えられた説明や解説が、本来の趣旨から逸脱して評価や批評に踏み込んでいる箇所が無きにしもあらずと、感じられる向きがあるやもしれません。時に皮肉めいた、時に直截なもの言いは、実は先端研御厨研究室の気風であり、それを表すの誉れよく受け継いだ後輩や教え子の筆さばきに、とても手入れは出来なかったことを、ここに正直に告白しておきます。

さらに、年史物としては画期的とも言える詳細なデータを、出入りの激しい先端研ゆえに、公表したという経緯があります。従って個々のデータに誤りが含まれていることはすでに編集段階で織り込み済みです。断片に過ぎない一次情報をとにかく読めるデータに仕上げたわけですから、第一次近似値として眺めて頂けると助かります。

このハードデータのその後は、これからの先端研が、しっかりと引き継いで行くこととなりますので、いつの日か、「正誤表」を伴った完全版を期待したいと思っています。

ご協力頂いた橋本和仁前所長・宮野健次郎所長を始め、我々の大胆さやまる編集活動を、寛容にもじっと黙って見て頂いた編集委員会の先生方に、深く頭を垂れてお許しをこいたと思います。

2007年10月